

叡智としての金本位制

—A. A. Young の所説—

松尾 隆

目 次

はじめに

I. 貨幣本位

I-1. 貨幣とその機能

I-2. 貨幣本位

II. 金本位制の自律性

II-1. 貨幣価値

II-2. 安定化のメカニズム

おわりに

はじめに

経済社会が抱える諸問題を如何に解決するか。これがYoungの学問的関心事であった。彼の考えでは、これらの解決は自由放任の政策に委ねるべきではなく、問題は探求され、あるべき姿は意識的に到達されるべきものであった。従って、経済学は、実用的装置でなければならず、管理を不可欠の要素とする学問でなければならなかった。しかしながらその一方で、彼は人間の叡智に基づく管理に全幅の信頼をよせていたわけでもなかった。

具体的には、Youngは、人為的裁量の下に貨幣制度を操作する考えや主張には、距離をおいていた。彼は、「全ての身体的不調の唯一の病巣を何らかの臓器に見出すやぶ医者のように、貨幣的変わり者は全ての経済的病弊の病巣を循環系に見出す」(Ely 1930, p. 235) と述べ、経済諸問題の解決の方策を貨幣数量

の管理に求める人々を「やぶ医者」に喩え、人間による貨幣制度の人為的操作の危うさを隠そうとしなかったのである。そして、結局頼るべきは歴史的に進化を遂げてきた貨幣制度、すなわち金本位制である、というのである。彼は金本位制を理想的な貨幣制度としては理解しなかったが、「人間よりも制度のなかにしばしば大きな叡智が潜む」(ibid., p. 236)、と考えるからであった¹。

景気循環との関連でいえば、確かにYoungの理解では、恐慌の直接の原因は金本位制それ自体に求められるべきではなかった。彼は、このことを理由に、金本位制を是認したのではない。叡智という言葉の中には、より積極的な内容が込められていた。それは、経済社会における貨幣の役割にかんする彼の理解に、支えられていた。貨幣は発明物でも、また単なるボールでもなく、それはまさに思慮する際の言語であり、経済諸関係に実質的影響を及ぼしうる存在である。これが彼の貨幣理解であった。

本稿では、以上の点も踏まえて、何故にYoungが金本位制を支持するのか、問うてみたい。

I. 貨幣本位

I-1. 貨幣とその機能

まず、われわれは、Youngがどの様に貨幣を理解していたのか、確認しておこう。彼の貨幣理解の特徴は、次の文章に示唆される。

「人々が物々交換の困難と不便を取り除くために貨幣を発明したという見解は、多くの他の憶測上の歴史に加えて、ごみ箱に捨てざるべき、信用のおけない考え方に属する。人々は、無政府状態というなんらかの神秘的な初期状態による不便を理由に、政府を発明したのではない。これと同様に、人々は物々交換の不便を理由に、貨幣を発明したのではなかった。貨幣の使用は、人間の他の諸制度と同様に、成長または進化

¹ ここで言う制度として、金本位制のほか、民主主義が指摘されている (Ely 1930, p. 235)。

してきた。その起源は曖昧である。にもかかわらず、かなり明確なことは、人類史に於いて人々は物々交換を通じて何らかの大量の交易をかつて行ってきた時期はない、ということである。交易の始まりと貨幣の起源の間には、溝が存在したにしても非常に小さいか、またはおそらく全く存在しなかった。」(Young 1924a, p. 4231. イタリックは原文。)

人間が、物々交換の不便を取り除くために、貨幣を発明したのではない。貨幣はその起源を交易の始まりとほぼ時を同じくするものであり、交易と表裏一体の関係にある。そして、現代の貨幣（制度）は、それを起源とする成長・進化の産物である、ということである²。

では、そもそも貨幣とはなにか。Youngがどの様に貨幣を定義しているのか、確認しておこう。彼が明確に「定義」という概念を用いて貨幣について言及しているのは、われわれが知りうる限りでは、「貨幣とは、それを差し出すひとの個人信用を考慮することなく、他の商品およびサービスとの引き換えに、習慣的に支払われそして受け取られる商品または商品群である、と定義されよう」(Young 1924a, p. 4232)、という記述のみである³。貨幣の機能というよりは、

² ちなみに、Youngは、Carlileの著書【Carlile 1901】のなかの貨幣本位の記述を啓発的であるとして高く評価しているが（1922年4月12日付のYoungのWilliam T. Foster宛ての手紙。Young papers）、同著の「現代の貨幣の進化」という名を付した前置きは、「生物学から拝借した成長、発展、進化という網羅的概念は、大多数の社会現象の説明において、他の全てのものに取って代わりつつある」という文章から始まる。Youngが、早い段階から生物学を意識していたことは、【Ely 1908】のなかの「政治的経済的文明化の進展と共に、諸金属が、最適者生存のプロセスを通じて、最善の貨幣商品であることは明白で議論の余地はないということを証明してきている」（Ely 1908, p. 217）という文章からも推し量ることができよう。もっとも、理由は明らかではないが、【Ely 1923】では「最適者生存のプロセス」という言葉は用いられていない。

³ 【Ely 1908】から【Ely 1930】まで、貨幣の章に目を通して明確な「定義」を見出すことはできない。ただし、【Ely 1908】では、貨幣の定義らしい記述として「ものが一般的にそれと交換される、そしてそれを用いて他のものの価値が一般に尺度される何らかの商品または諸商品」と言及している。【Ely 1916】では、「尺度される」が「表される」に書き換えられているが、他の部分は同じ記述である。しかし、【Ely 1923】と【Ely 1930】では、この部分の記述は消え去る。

「習慣的に支払われそして受け取られる」という人間の行為に着目しての概念規定であるようにも思える。このような点をおさえたところで、今少し、「商品または商品群」の内容に触れておこう。さらに、Youngは何故に金が貨幣としての地位を占めるようになったと理解するのか、傾聴しておこう。

Youngは、「貨幣の最も初期のそして単純な諸形態は、牛、穀物、毛皮、油、塩、たばこ、象牙、貝殻、そして茶のような普通の商品であった。これらは、様々な時と場所で、貨幣目的で用いられてきている。しかし文明化の進展とともに、諸金属が最善の貨幣商品であることが明白となってきている」(Ely 1930, p. 231 イタリックは原文)、という。具体的には金属とは貴金属のことを意味するが、それが最善の貨幣商品としての地位を占めるようになった理由として、Youngは貴金属の「資質」を指摘する。「それらは耐久性があり、容易に認識されそして証明される、そして便利な形態と重さの単位に分割できるにちがいない。さらに、他の大部分の商品と比べてみると、貴金属は価値が比較的安定している」(ibid., p. 231)、ということである。しかし、「ある面では、それらが非貨幣的に使用されるという特徴に由来する」(ibid., p. 232)とも述べている。この側面は、資質を補完する副次的要因にすぎないということではない。Youngにとっては、この特徴が貨幣理解にとっての要点である⁴。これこそが貨幣にみられる「まさにひとつの基本的特徴」(Young 1924a, p. 4232)を構成する。「貴金属は、ほとんど最初の時から、装飾のための素材として使われてきたし、そしてまたほとんど最初の時から、それらは貨幣として用いられてきている」(ibid.)ということである。さらに、貴金属が「装飾のための素材」であるということと貴金属が貨幣として用いられるということの関連性について、次のように述べる。「我々の装飾 (ornament) および虚飾 (display) という好み (tastes) に仕える商品への需要は、生活の必需品への需要よりも、遙かに弾

⁴ Youngは、貨幣としての貴金属について、次のように述べている。「初期の人々の貨幣や現代の人々の様々な貨幣に関する事実を調べることで、われわれはそれらの貨幣がまさにひとつの基本的特徴を備えていることに気づくべきである。貴金属は、ほとんど最初の時から、装飾のための素材として使われてきたし、そしてまたほとんど最初の時から、それらは貨幣として用いられてきている。」(Young 1924a, p. 4232)

力的である」(Ely 1930, p. 232)、と。貴金属を貨幣として支払う側から見れば、貨幣商品への需要の弾力性は、「贅沢品およびそれらの素材にはより確実な市場がそしてより確実な捌け口が存在する」(Young 1924a, p. 4231)ということであり、先の貨幣の定義に照らし合わせれば、「習慣的に受け取られる」ということである。「貨幣のひとつの真に基本的特徴は、保有者が不当な損失を伴うことなくそれを処分できるべきである」(ibid., p. 4232)とするならば、需要の弾力性が極めて重要な要素となる。Youngは次のように述べている。「それを受け取る人の希望と意図が、何が貨幣であり、何が貨幣でないかという疑問と重要な関係にある」(ibid.)、と。

われわれは、抽象的ではあるが、まずはYoungの貨幣理解の基本的特徴を探った。しかしながら、われわれはここで確認しておくべき点がある。それは、Youngが叡智としての金本位制を問題とする場合、その貨幣制度とは近代的な銀行制度の存在・展開を与件としたより複雑なそれである、ということである。以下、具体的に見ていこう。

まず、貨幣の意味について。Youngは、「現代の経済生活」(Ely 1930, p. 232)では、貨幣という名称の下に様々なものが存在し、しかも貨幣とそうでないものの間に線引きを行う際の明確な基準は存在しないが、彼自身は貨幣の「意味」を限定して用いる、という。その際、彼は、「貨幣」という名称を「交換手段として手から手へと自由に流通する一般的受容性 (*general acceptability*) の諸手段」(ibid., イタリックは原文)に限定する。この狭義の貨幣範疇に含まれる手段は、具体的には、「政府によって鑄貨にされた金属貨幣、政府によって発行される紙幣、銀行券」(ibid.)である。彼の基準は「一般的受容性」の程度であり、「それを受け取る人の希望と意図」が影響するということであろう。このことは、彼が狭義の貨幣に預金貨幣を含めないことから、推測できよう。預金貨幣に関連して、次のように述べる。「かれらの銀行勘定宛てに個々人が振り出す小切手は、これに照らすと、貨幣、または貨幣手段ではない。なぜならばそれらは手から手へと交換手段として自由には渡らないからである。小切手は、支払いに小切手を差し出す人の正直さと支払い能力を信頼する人に対する支払いを行う際にのみ用いられる」(ibid.)、と。もっとも、「広い意味では、貨幣

は要求次第で（これまで限定した狭い意味での）貨幣を受け取る権利の形態での信用を含む」（*ibid.*、イタリックは原文）と述べて、広義の貨幣範疇には、「小切手、手形、そして他の形態の銀行信用」（*ibid.*, p. 233. イタリックは原文）を含めている。

次に、貨幣の諸機能について。Youngは、この点について、次のように述べる。

「貨幣は何にもまして交換手段（*medium of exchange*）である。もし手形と小切手を貨幣と見なすならば、この表現は交換の際の不可欠の道具としての貨幣に当てはまる。しかし貨幣は一般に受容される交換の道具以上のものである。貨幣は、交換が命を吹き込まれ、呼吸し、そして存在を有する際の要素または手段である。それは、ビジネスが会話するだけでなく思慮する際の言語である。それは、日常の有用な価値本位（*standard of value*）または価値尺度（*measure of value*）であり、移ろう基準、そして時々人を惑わす基準である。」（Ely 1930, p. 233. イタリックは原文。）

この引用文から、われわれは、Youngが貨幣の機能として交換のための手段と価値本位乃至は価値尺度を峻別し、とりわけ後者の機能に着目しかつ重きをおいていたことを窺い知ることができる。とはいえ、Youngは、別の文献で、交換手段と価値尺度という機能はひとつの機能である、と指摘している。その理由について、傾聴しておこう。

「素直に解釈し、そして理解すれば、交換手段として役立つということと、価値尺度として役立つという二つの機能の間には、真の違いは存在しない。

われわれが実際に貨幣を『価値尺度』として用いるのは、商品を貨幣と現実に交換する際、またはそのような交換を行うかどうか決断するときのみである。もちろん、同じような方法で、物差しは長さの尺度と測る際に用いられる手段の両方であると述べてもよい。誰もがこれらの物

差しの二つの機能は実際ひとつの機能であるというであろう。貨幣についてもまったくそう言える。価値をはかることそして交換手段として役立つことは、ただ一つの機能であって、二つの機能ではない。」(Young 1924a, p. 4233. イタリックは原文。)

このように、Youngは、物差しに喩えて、貨幣の交換手段機能と価値尺度機能をひとつの機能であると述べ、さらには「無駄な論争」を回避するために「支払手段 (means of payment)」という概念を提案する (ibid.)。

さらに、われわれが確認しておくべきことは、Youngが貨幣の諸機能のなかで特に「価値本位または価値尺度」機能を重視しているが、両機能は同一機能であって、単に表現の問題であると理解すべきであるのか、それとも全く異なる機能として理解すべきであるのか、ということである。結論を先取りすれば、Youngはこれらの概念を明確に区別して理解している。この点に関して参考となるのが、【Ely 1908】の「貨幣」の章の小見出し「価値本位」で記述される内容である。そこでは、「商品を貨幣と交換するまさにこの過程で、われわれは必然的に貨幣をタームにしてその価値を尺度し、そしてただ交換手段として貨幣は価値をはかる」(Ely 1908, p. 221)として、上記のひとつの機能という点を指摘したあとで、米国を例に、「価値をはかる実際の交換手段」として、鑄貨や紙幣などの種々の貨幣を列挙し、それらは「ドル」とであると述べている。このことから、Youngが価値尺度機能という場合に、具体的に想定しているのはドルという貨幣に特有の計算名での表現であり、したがって計算貨幣を念頭においている、と解釈できる。一方、価値本位は価値尺度とは異なる。Youngは「金は、硬貨形態であれ地金形態であれ、ドルの価値を固定するのが金の価値であることから、価値本位を構成する」(ibid., p. 223)という。この記述から、われわれは、貨幣本位が計算貨幣ではなく貨幣としての金に関係する範疇であることを、しかも価値尺度の基底に位置しそれを固定する金の価値に関係する範疇である、と理解できるのである。

I-2. 貨幣本位

前節では、われわれは、Youngの貨幣および貨幣の諸機能を理解し、整理するという作業を行った。そこで明らかになった特徴とは、ひとつには、彼が貨幣の起源を贅沢品としての商品に求め、そしてそれから成長・進化したものとして現代の貨幣制度を理解しているということ、さらに、貨幣の機能に関していえば、価値尺度機能とその基底にある価値本位機能が経済主体の判断や行為に及ぼす実質的な影響に着目して、貨幣の交換手段機能よりもそれらの機能を重視している、ということであった。同時に、このことは、推測するに、古典派経済学の貨幣把握を強く意識したうえでのことでもあった。なぜならば、手紙のなかに、次のような記述が存在するからである。

「古典派の経済学者達は、生産、分配の一般理論から、そして交換の一般理論からすらも、貨幣使用を捨象した。すなわち、かれらは、財と、ある程度は用役によって構成されるものとしての生産物と所得に注目し、そして人間が富の生産に従事し、富を貨幣よりはむしろ財に等しいものと見なす過程として、全経済過程を視覚化しようと試みた。貨幣が為すことは単に財の交換を促すことであった。彼等のひとりが述べたように、貨幣は流通の軸を滑らかにする油にすぎなかった。

かれらは貨幣が購入するものによって構成されるものとしての実質賃金を考えた。貨幣は表面的なものにすぎなかった。いくらか似通った方法で、かれらはより根底にある価値の単なる表現として価格を見なしたようにおもわれる。

今日、現代の経済システムの最も基本的特徴は人間が貨幣で思考することを学んできているということである、と考える集団が存在する。われわれの具体的経験が貨幣価格、貨幣所得、そして一般的には貨幣システムに関係しているという明白な事実にもかかわらず、価値と富というような抽象を行い、そしてそれらを実質的と呼ぶのは、単に古風な現実主義である。」(1921年10月28日付のYoungのLeonard Siff宛ての手紙。

Young papers.)

われわれは、引用文に関して、補足説明を加えることはしない。ここで改めて、先に貨幣の機能の説明で引用した次の一文を記憶に呼び戻そう。「貨幣は、ビジネスが会話するだけでなく思慮する際の言語である。それは、日常の有用な価値本位または価値尺度であり、移ろう基準、そして時々人を惑わす基準である」という指摘である。若干補足説明をおこなうと、たとえば、企業家達は、不確実性の経済生活において、貨幣を与件とし、貨幣という「言語」を用いて、将来を予測し、判断し、そして決断する。したがって、この意味で、貨幣は経済活動にとっての思考の基準、しかも事前的な基準である、と解釈して良からう。また、貨幣が経済諸関係へ実質的な影響を及ぼしうるという意味では、それをあくまでも消極的な存在として理解されるべきではなく、貨幣の積極的側面が看過されることなく、むしろ注目されるべきである、ということであろう⁵。

加えて、Youngが貨幣の機能として交換手段機能よりも価値本位機能を強調する理由には、具体的には、「いわゆる金貨幣価値の『数量説』」(Ely 1908, p. 279) への問題提起があった。「これは、他の事情が同じならば、物価は流通にある貨幣量と比例して変化する、という説である」(ibid.) が、彼は、この説について、次のような疑問を投げかけていた。

「次のような理由から、この説のいくつかの主張には難点がある。それらは、(1)貨幣量の変化と物価の変化の間の厳格な数学的関係という非常に疑わしい問題を過度に強調する、または(2)価値本位を価値の『尺度』または『デノミネーター』と混同する、または(3)価値の商品本位の必要性を認識することができず、そのために本位商品の産業的使用がその価値に及ぼす影響に意義を与えることをしない。数量説の最も極端なもの

⁵ Youngは、「『通貨による手品』は実質的 (real) 影響を持つ。比較的旧い (The older) 経済学者は、経済諸関係への実質的な影響を考慮することなく、経済問題を、貨幣の使用が単に便利であるとして、議論する傾向があった」(1923年1月9日付のYoungのBruce Bliven宛の手紙。Young papers)、と指摘している。なお、「比較的旧い経済学者」という言葉は【Young 1928】の中でも用いられており、後者の文献に依れば、具体的には、A. Smithに始まりJ. S. Millに至る経済学者達を指しているように思われる。

は、名目貨幣の可能性を支持する議論の基礎をかたちづくるのである。」(Ely 1908, pp. 279-280.)

われわれは、この引用文から、いかにYoungが価値本位を重視していたか、そしてそれを貨幣理解の鍵として認識していたか、窺い知ることができよう。この点を確認したところで、本稿では、主に(2)と(3)の内容について、敷衍してみたい。(3)の内容は次節で取り上げるとして、本節では価値本位の具体的内容を探ることにしたい⁶。

問題は、Youngが価値本位について詳細な説明を行っているわけではない、ということである。その一方で、彼は、当時のアメリカの貨幣制度の分析を行い、そして同制度を「十分な貨幣制度」(Ely 1930, p. 236)である、と評価している。彼がこのような評価を行うに際して、価値本位を念頭においていたことは、容易に推測できよう。そこで、われわれは、迂回的な方法ではあるが、彼が説明するアメリカの貨幣制度の特徴を探るという作業を通して、上記の課題に接近してみたい。

Youngが「十分な貨幣制度」と評価するアメリカの「貨幣制度の基本的事実」の内容は、次の通りであった。

「異なる種類の貨幣と商品及び用役の交換を通じたドルでの価格の記録、全ての様々な貨幣の交換可能性を通じた貨幣間のドルの比価の維持、そして25.8グレインの金地金の価値へのドル価値の自律的 (automatic) 同等化。」(Ely 1930, p. 238)

この短い文から、次の三つの点を確認できるであろう。ひとつは、ドルという貨幣名を用いた価格の表現、すなわち値踏みと同時に、貨幣を手段とする交換という事実である。われわれの理解からすれば、貨幣の価値尺度と交換手段

⁶ 引用文の(3)には、不換通貨制度にかんする大切な論点が含まれているが、この点については、別の機会に譲りたい。

としての機能を意味し、Youngの提案する支払手段としての機能に整理できる。価値本位機能との関連では、残りのふたつが重要である、と推測される。

まず、「全ての様々な貨幣の交換可能性を通じた貨幣間のドルの比価の維持」について。この内容の理解には、当時のアメリカでは、金貨、1ドル未満の硬貨、政府紙幣、連邦準備銀行券、連邦準備券、国法銀行券、金証書、銀証書など、様々な貨幣が流通していたという現実を認識しておく必要がある。このような状況にもかかわらず、Youngが指摘したいことは「様々な種類の貨幣は価値が等しい」(ibid., p. 237) ということであり、「価格を表現する際の単位の統一性」(ibid.) が実現されている、ということである。問題は「今日のドルを価値の点で均一にしているものとはなにか」(ibid.) ということである。「ドルの比価の維持」が実現されているのは、様々な貨幣が「互いに交換可能である」からであり、さらに「重要なことは、全ての他の種類の貨幣が、直接的または間接的に、金貨と交換されうる、ということである」(ibid., p. 238. イタリックは原文。)、という。要するに、アメリカの貨幣制度では、現実には様々な貨幣が流通しているにも係わらず、貨幣間の相互交換が可能であり、さらには金貨との交換が可能であることから、貨幣間の価値の同一性が実現・維持されている、ということである。

次に、「25.8グレーンの金地金の価値へのドル価値の自律的同等化」について。まず、「25.8グレーンの金地金の価値」という具体的数値が意味するものとは何であろうか。察するに、1900年3月14日の金本位法と関係しているとおもわれる。なぜならば、同法によって、純度10分の9の標準金（品位）25.8グレーン（量目）をもって1ドルと定められていたからである⁷。よって、「25.8グレーンの金地金の価値」とは、貨幣鑄造法に定められた度量単位であり、われわれの言葉を用いるならば、価格の度量標準を意味する、と解釈できる。では、残りの半分、すなわち、金地金の価値への「ドル価値の自律的同等化」とは何を

⁷ このことは、次の文章からも推測できよう。「われわれの現在の貨幣鑄造法が効力を有する限り、金貨は常にドル当たり同量の金を含有しなければならない。ドルは標準金25.8グレーンを含む硬貨として定義される。標準金は金が10分の9と卑金属が10分の1であることから、1ドルには23.22グレーンの純金が含まれる。」(Young 1924b, p. 4302)

意味するのであろうか。ここでいうドルが様々な種類の貨幣を意味することは自明であるが、最終的には様々な貨幣は金貨との交換可能性を有することを考慮するならば、現実に流通している金貨の価値が、例えばそれが1ドル金貨であった場合には、「25.8グレーンの金地金の価値」に自律的に同一化するメカニズムが存在する、ということの意味する。その具体的メカニズムについて、Youngは次のように述べる。「だれであれ如何なる量であれ基準となる質をもつ同じ重量の金地金によって、造幣局を通じて、金貨が保証される限り、そして金貨が金地金に自由に鑄つぶしされうるかぎり、金貨とその金属の中身の価値の間に何らかの容易に判断できる乖離が存在しうるということはあり得ない」(ibid., p. 238)、と。すなわち、自由鑄造・鑄潰制度が自律的に金地金と金貨の価値を同一化させる機構として作用する、ということである。

以上のことが、Youngが「十分な貨幣制度」というアメリカの貨幣制度の内容であった。このように理解できたところで、Youngに傾聴しつつ、概念を整理しておく、と、金貨は、その地金としての価値が硬貨としての価値に等しいことから、「本位貨幣 (standard money)」であり、金は、硬貨形態であれ地金形態であれ、「貨幣本位 (monetary standard)」である (ibid., p. 238)。さらに、もう一点。われわれはこれまで「価値本位」という概念を幾分曖昧なまま使用してきたが、Youngにおいては「価値本位」とは「貨幣本位」のことを意味し、また後者がより適切な言葉であると考えていたということを指摘しておきたい⁸。

アメリカの「貨幣制度の基本的事実」に基づいた貨幣本位を踏まえた上で、改めて、Youngに貨幣本位の内容を整理してもらおう。両者の間には、幾分違いもみられる。

「まさに、私が貨幣本位をどういうものとして考えているか、述べさせ

⁸ Youngは、「貨幣本位」について「『価値本位』よりは遥かに好ましい語句」(1922年4月12日付のYoungのWilliam T. Foster宛ての手紙。Young papers)である、と指摘している。また、【Ely 1908】の小見出しの「価値本位」は、【Ely 1916】以降では姿を消し、かわりに「貨幣本位」という小見出しが付けられるようになったことから、両者をほぼ同様の範疇として解釈しても良からう。

てください。まず、第一に、それは貨幣の観点からその価格が明確に固定されるひとつの商品である。第二に、貨幣本位はそれ自体金兌換の貨幣である。第三に、それは、または常に金に直接基礎をおく何らかの貨幣は、残高の支払いに用いられなければならない。わたしが残高の清算のための支払いという場合、それは、個々の銀行間での支払、異なる地域間での支払、または異なる国々の間での支払、そのいずれをも意味する。」（1922年4月12日付のYoungのWilliam T. Foster宛ての手紙。Young papers.）

引用文はYoungがFosterへ宛てた手紙からの引用であるが、この手紙自体はFosterが分担執筆した「金基礎の章」の原稿への彼のコメントである。Fosterは翌年に【Foster 1923】を出版しているが、同著の第6章は「貨幣と金基礎」というタイトルが付されており、察するに、手紙はこの著書の原稿へのコメントと思われる。なお、この手紙には、Youngの貨幣観を理解する上で極めて参考となる内容が含まれていることから、これを参考に、われわれなりに貨幣本位を解釈し、さらに敷衍しながら理解を深めてみたい。

まず、「価格が明確に固定されるひとつの商品」について。これまでの記述から、貨幣本位が「ひとつの商品」であるということは、貨幣の起源に照らして考えるならば、自明と思われる。しかし、実は商品という主張には、金本位制の自律性との関連で、重要な意義が見いだされるのである。この点については、次節で取り上げることにする。ここでは、「価格が明確に固定される」という言葉に込められた意味を確認しておきたい。固定する主体は、「貨幣本位は政府が固定価格で売買する商品である」（Ely 1930, p. 238. イタリックは原文。）という指摘から、政府である。では、なぜ価格が固定されなければならないのか。この意味を理解するためには、われわれは、「ビジネスが会話するだけでなく思慮する際の言語」であり、「人を惑わす基準」となりうることを、言い換えれば、貨幣が経済諸関係に実質的影響を及ぼすということを、思い起こす必要がある。とするならば、「固定」という言葉のなかには、次のような考えが込められているのではなからうか。すなわち、貨幣は人を惑わす言語となってはならな

いのであって、価格の度量標準が変動しないことが貨幣制度のあるべき姿である、という考えである。言い換えれば、価格の度量標準の事前的確定性の意義が、固定という言葉に、積極的に示されている、と解釈できないであろうか。このように解釈できるとするならば、この固定性の維持が政府の極めて重要な役割ということになる。

第二のポイント、「貨幣本位はそれ自体金兌換の貨幣である」について。具体的には、金が貨幣本位であり、そして「貨幣本位は他の貨幣形態が最終的には支払うべき明確な実体としての役割を果たす」(Mehring 1997, p. 55)、ということであろう⁹。ここで一步踏み込んで、「兌換」の意味について、確認しておこう。この点に関しても、Foster宛の手紙はYoungの考えを知りうる数少ない重要な文献である。具体的には、次のような記述がある。

「わたしは、金準備の使用は『信頼を維持する』ことであるというあなたの見解を受け入れることはできない。あなたはあなたの敵の思うつぼにはまっている。確かにその貨幣を他の誰かに渡すことが出来る限り、一般の人は使用する貨幣の兌換性に注意を払わないということは真実である。しかし、銀行家、外国貿易業者などは、貨幣の兌換性に極めて重大な利害関係がある。金準備の使用は兌換性を維持することである。」

(1922年 4 月12日 付のYoungのWilliam T. Foster宛ての手紙。Young papers.)

なぜ、YoungはFosterの考えに組みすることができないのであろうか。「信頼を維持する」とは、どういうことを意味するのであろうか。この間に答えるために、われわれが利用できる文献は【Foster 23】のみである¹⁰。第6章「貨幣と金基礎」のなかには、次のような記述がある。

⁹ Youngの貨幣本位については、同時に、【Mehring 1997】を参考されたい。Mehringは、第一のポイントを世界規模の市場の統合に絡めて、また第三のポイントについては、残高が経済システム全体に果たす制御機能に絡めて、解釈している (ibid., pp. 54-56)。

「人々は紙幣が金に転換されうると考えるから、かれらはそれを受け入れるのではない。かれらの日々の経験から、かれらが他の人々が自由にそれを受け入れるであろうと確信しているから、かれらはそれを受け入れるのである。もし、何らかの別のものに基礎をおく貨幣で、来る年も来る年も、かれらが日々同様の経験を積んできていたならば、かれらはその貨幣を受け入れ続けそしてその基礎について何ら考えないままであろう。しかしその可能性は低いであろう。金基礎を放棄してきたどの国も、人々の間でその名目貨幣が『金と同じくらい満足できる』ものであるかのごとく受け入れられるであろうという信頼を維持することは不可能であるということが、理解されてきている。この信頼を正当化するための金準備の使用が金の二番目の貨幣的機能である。」(Foster 1923, p. 83. 下線は引用者の強調。)

まず、言葉の意味を確認しておく、Fosterは金の貨幣的機能としてふたつをあげる。すなわち、通貨としての金と準備としての金である。引用文は後者に関係する。また、紙幣概念には、「金証書及び銀証書、米国証書、財務省証書、国法銀行券、連邦準備銀行券、そして連邦準備券」(Foster 1923, p. 23) が含まれる。これらの点を確認したところで、「信頼を維持する」とは何を意味するのか、という疑問点に話を戻そう。引用文から、「信頼」とは、他の人々による貨幣の受容性への信頼である。それは決して、兌換性の維持それ自体への信頼ではない。Fosterは、そもそも百パーセント準備ではないことから完全に兌換を

¹⁰ 引用文がYoungの目にした草稿と寸分違わぬ内容であるとはいえ、学問上厳格さに欠けるという点は決して否定できない。参考にする理由はいくまでも資料上の制約による。もっとも、それだけではない。Youngの批評にもかかわらず、Fosterが内容の基本に変更を加えなかったという推論を若干補強する記述が、手紙の中にはみられる。Youngは、手紙の末尾で、出版に際して自らの批評に厳格に応える必要はなく、率直にFosterに出版することを勧めている。さらには、「私の批評のあるものはわたし固有のものであって、他のエコノミスト達はそれらに賛同しないと述べるべきである」と付け加えてさえいる。なお、Fosterたちは、著書の「はじめに」のところで、「原稿」に目を通してくれたエコノミスト達に謝意を示しているが、そこにYoungの名前は見あたらない。

遂行することはできない、と主張する。兌換の意義は、あくまでも、「信頼を正当化する」ことであり、その心理的効果にあることから、部分準備を保有するのみで十分である、と理解する (ibid., pp. 82-83)。

もちろん、Youngの兌換の理解は異なる。彼は「債務それ自体支払いがなされるべきものである」から、そもそも「貨幣を欠いた信用は不可能」(Young 1924a, p. 4236) であるという理解のもとにあった¹¹。手紙では、「あなたは百パーセント金準備を保持していないという事実之余にも多くの注意を向けすぎる」、「適切な規模の金準備は心理的基準によって固定されるものではない。それは輸出や他の目的での現実の具体的な金需要に対する理にかなった確率の問題である」と指摘し、「あなたの主張には同意できない」、と記している。加えて、Youngは、「一般的な交換手段としての金使用と貨幣本位としての金使用の間には非常に大きな相違が存在」し、「両者の間に必然的關係は存在しない」のであるが、Fosterは両機能を「混乱している」とコメントする。さらに、米国の貨幣制度の特徴である金貨流通は、貨幣本位との関連でいえば、必要な要件ではないということであり、実際、別の手紙では、「金貨はほんの少ししか意義はない」(1923年6月22日付のYoungのH. M. Waite宛の手紙。Young papers) と指摘している¹²。

最後に、第三のポイントの意味するところは、「決済制度 (clearing system)」(Ely 23, p. 262) のことであろう。「制度としての銀行は債権と債務がお互いに突き合わされそして相殺される決済センターを提供する」(ibid. イタリックは原文) ののである。すなわち、Youngの「決済制度としての銀行の一般的分析」(1921

¹¹ 改めて、関連するYoungの言葉を引用しておく。「われわれは、貨幣を欠いた信用は不可能であるという事実が見えなくならぬようにすべきである。」「われわれは貨幣を廃止し、そして支払い手段として債務を用いることで非常にうまくやっていると述べることに、誰も異論はないのであろうか。異論があるのは明らかである。債務というものは支払い手段ではほとんどあり得ない。というのは、債務それ自体支払いがなされるべきものであるからである。」(Young 1924a, p. 4236)

¹² 手紙の中でも、「太平洋岸を別にすれば、戦争の遙か前に、金は直接流通の交換手段としては消え去った。事実として、合衆国の国民は交換手段として金をさほど用いなくなってきた。同じことはイギリス、カナダでも真実である」(1923年6月22日付のYoungのH. M. Waite宛の手紙。Young papers)、と指摘している。

年10月11日付のYoungのColston M. Warne宛の手紙。*Young papers*）である。

若干補足説明しておく、例えば、連邦準備制度の下では、同一銀行を利用しての貨幣の受払は預金貨幣を用いた振替転記という単純なプロセスを経て、そして銀行間の場合には手形交換などを通じた決済尻の決済は加盟銀行が連邦準備銀行に預けている預金勘定を用いて遂行され、さらに異なる連銀間の決済は連邦準備局の「金決済基金（gold settlement fund）」が用いられる。Youngは、このように銀行制度に組み込まれた決済制度によって「時間と貨幣の顕著な節約」（Ely 1923, p. 263）が実現される、と主張する¹³。そして、国内の決済システムに「極めて類似したプロセスが国際的交換（international exchange）でも見られる」（*ibid.*）、と指摘する。もっとも、「金は、鑄貨であれ地金形態であれ、国際的貨幣本位であり、異なる国の間の最終的な取引残高を支払う手段である」（Young 1924a, p. 4234）ということは繰り返すまでもなからう。

ところで、Foster宛の手紙に記された「常に金に直接基礎をおく何らかの貨幣」とは、具体的には、何を意味するのであろうか。あくまでも推測の域を出ないが、Youngは金為替本位制を念頭においていたのではなからうか、とおもわれる。同制度について、彼は次のように評価している。「うまく管理されているところでは、それはうまく機能してきた、しかも金通貨を導入しそして維持するための費用を伴うことなく、またある時には、新しい貨幣を国民に馴染ませるといふという試みも必要なく、それを導入している国々に、金本位制の利点のすべてをもたらしさせている。」（Ely 1930, pp. 248-249）ここには、国際的な金節約のシステムとしての金為替本位制への移行の可能性が示唆されているようにもおもわれなくもない。

以上のことから、貨幣本位の具体的な存在形態は、中央銀行制度を前提とすれば、中央銀行の金庫のなかの準備金ということであろう。この準備金は兌換のための準備金である。もっとも、銀行制度に組み込まれた決済制度によって

¹³ Youngは「アメリカのような国では、商業取引の9割は貨幣よりは信用の助けを借りて遂行される。純粹に量的観点からすれば、信用は貨幣よりも遙かに重要である」（Young 1924a, p. 4236）、と指摘している。

債権債務が相殺されることから、金節約がなされる。しかし、Youngは、金が必要でないから節約される、とは考えない。「金準備は使用されるべきものである。それらの金準備の基本的目的は銀行間、地域間、そして国際間の残高の支払にある」(1922年4月12日付のYoungのWilliam T. Foster宛ての手紙。Young papers) からである¹⁴。

Youngの考える貨幣本位と米国の実際の貨幣制度の間には金貨流通の点で違いが見られるにしても、貨幣本位の基本的特質を後者が備えていることから、彼にとって、米国の貨幣制度は「十分な」制度であった、と理解して良からう。内容の繰り返しになるが、Youngは、古典派経済学者達とは異なって、貨幣の諸機能のなかでも経済活動を担う私的な経済主体の思慮のための言語ともいえるべき「貨幣本位」に、特別の関心と意義を付与する。その際、具体的には、歴史的に確立し、展開を遂げてきた金本位制が¹⁵、しかもその制度の下に発展を遂げてきた近代的な銀行制度が前提とされていた。金貨は通貨としての意義を失ってきていることから、本位貨幣である金は、中央銀行制度の下では余剰準備の管理主体としての中央銀行の金庫に実質的に地金形態で存在すればよい。この金準備は、国内で流通している様々な貨幣の兌換のための準備であり、また対外的には最終的決済手段としての金のための準備であり、そしてその様なものとして用いられるべき存在である。同時に、金の価格は、貨幣という観点から、政府によって固定される。われわれなりに解釈すれば、それは価格の度量標準のことを意味し、しかも価格標準は経済主体の思慮のための言語であることから、事前的に確定され、持続的に固定されるべきである、という主張におもえる。

¹⁴ この文言は、直接には、Fosterの考えの過ちを正すためのものであった。引用文の前には次のような指摘がなされている。すなわち、「再度、私は、あなたが金使用は疑いを晴らすためであると述べる場合、あなたは全く間違っていると思う。金準備の目的は金需要を妨害することよりも現実の金需要を満たすことにある。大戦以前のイングランド銀行の準備の変化を少しでも勉強すると、このことが明らかになる」(1922年4月12日付のYoungのWilliam T. Foster宛ての手紙。Young papers)、と。

¹⁵ ちなみに、Youngは、「合衆国は事実上1834年以降金本位の下にあったが、この本位は1900年に法律で始めて公式にそして明確に認められた」(Ely 1930, p. 246)、と指摘している。

II. 金本位制の自律性

II - 1. 貨幣価値

Youngが貨幣本位という場合、それは具体的には金を意味し、従って彼が念頭におく貨幣制度とは金本位制のことであった。とはいえ、Youngにとって、金本位制は決して理想的な貨幣制度ではなかった。このことは、次の引用文から、明らかである。

「理想的な貨幣制度とは物価に安定を与える制度であろう。金本位制は、この点に照らすと、理想からかなり懸け離れている。その最大の主張（claim）は、それが物価に安定を与えるということではなくて、人が言うように、それがその作用において自律的（automatic）である、ということにある。物価の一般的な変動、すなわち上下交互の変動を受け入れざるを得ないとするならば、変動が政治的操作の結果または如何なる種類のそれであろうとも裁量的調整の結果であるよりは、変動は金のような相対的に安定的商品の産出の変化によって支配されるべきであるということの方が、われわれにはより好ましい。金本位制についていえば、それは完璧ではないが、相当に『安全（fool-proof）』である、と述べてよかろう。」（Young 1924b, p. 4303）

われわれは、引用文から、Youngが、たとえ物価安定を実現しないという欠点があるにしても、金本位制に組み込まれた自律性を高く評価し、貨幣制度の管理を裁量に委ねるよりも、その自律性に委ねる方が遙かに安全であるという理解の下にあったことを、確認できるのである。以下、これらの内容を掘り下げてみよう。

まず、物価安定という問題について。前節では、われわれは、Youngが、貨幣本位としての金に着目し、政府の金買入れ価格が固定されていること、すなわち価格の度量標準の事前的確定性を重視しているという点を強調した。だが、物価安定という問題に照らすと、彼の着目点は移っている。われわれなり

に理解すれば、ここでのYoungの論点は、商品の価格と貨幣の関係、すなわち貨幣の価値の問題である。

では、「何が様々な貨幣に価値を与える」(Young 1924a, p. 4234) のであろうか。前節の議論から明らかなように、それは政府ではない。Youngは、「硬貨の基本的特徴は政府の刻印である、政府が刻印で硬貨に価値を与える、すなわち硬貨に価値を与えるのは政府の権力と権限である、という流布した幻想が存在する」と述べ、貨幣の価値を政府の刻印にもとめる考えを「幻想」という言葉で一蹴する¹⁶。この点について、彼自身は、次のように説明する。「10ドル金貨を金床の上に置き、重たい大きなハンマーでそれを潰しなさい。残される不格好な金塊は硬貨ではないが、しかしそれは全く10ドルの価値があるでしょう」(ibid.)、その際に失うのは、ただ有益で便利なラベルだけである、と。繰り返すまでもなく、Youngが貨幣の価値を規定するものが金という金属の内容であると考えていたことは自明である。

もっとも当時の学問の世界を意識してか、Youngは「貨幣価値によって、ひとつの意味のみを定義することは困難である」(1922年4月12日付のYoungのWilliam T. Foster宛ての手紙。Young papers)、と述べる。それ故に、彼自身の言葉で、貨幣の価値を定義してもらうことにする。

「われわれが『貨幣価値』によって意味するものとは、他の物の貨幣価格によって報告または表現される貨幣の購買力のことである。貨幣は、実は、それが購入する異なる物の異なる数量によって表現されるものの、非常に多くの異なる価値を持っている。もし小麦の価格がブッシュェ

¹⁶ Youngが、このような主張を行う際に、G. F. Knappを念頭においていたことは明白である。例えば、F. Knightは、1915年から1916年に、コーネル大学でYoungのクラスに参加し、講義の内容を講義ノート(“Money and Banking”)として残しているが、そのなかには、Knappの著書【*Staatliche Theorie des Geldes*】の記述があり、また「自らをノミナリストとして区分している」という記述がある(Knight papers)。なお、Youngは貨幣国定説の理論上の誤りを指摘するだけではない。「この概念は非常に有害であった、そして一回ならず、政府によって健全性に欠ける貨幣政策の言い訳に使われてきている」(Young 1924a, p. 4234)と、極めて厳しい批判を加えている。

ル当たり 1 ドルであるならば、その場合貨幣の 1 価値（小麦価値）はドル当たり 1 ブッシェルである。」（Ely 23, p. 291）

ここで注意すべき点は、他の商品とは異なって、貨幣としての金は直接の消費対象ではない、ということである。「貨幣本位としての金の使用を説明するさいにもっと重要な要因は、大部分の生活必需品に対する需要が非弾力的である一方で、金に対する需要が弾力的である、ということである。」（1922年 4 月 12 日付のYoungのWilliam T. Foster宛ての手紙。Young papers）。この点が金の価値の理解にも関係することになる。生活必需品の場合、その商品の価値は効用から導き出される。「限界効用は、人間の欲望を満足させるものの能力に左右される。そして貨幣は、欲張りという異常な欲望を例外とすれば、ただひとり人間の欲望を直接に満足させるものではない。われわれが貨幣を欲するのは、われわれがただ単に貨幣が購入するであろうものを欲するからである。」（Ely 1923, p. 292）したがって、貨幣としての金の価値は直接それ自体の効用から導き出しえない、ということになる。「貨幣価値という問題は、他のすべての商品の貨幣価値という問題の裏返しである。」（ibid. イタリックは原文。）貨幣の購買力が貨幣の価値ということである。

以上の点をおさえたところで、物価安定という観点から金本位制を見ると、それは「理想からかなり懸け離れている」、ということの意味を問うてみよう。Youngが物価安定を問うとき、貨幣の購買力の変動を問題にする。Youngは、「価値本位としての貨幣」には「欠陥」があり、これに絡めて、「購買力の極端な変化は通常紙幣でのみ生じるが、金の購買力もまた変化するし、そして時折急激に変化する」（ibid., p. 233）、と指摘している。従って、金本位制が理想的な貨幣制度からはかけ離れていると指摘する際に、Youngが念頭に置いていたこととは、貨幣としての金の購買力は、決して不変ではありえず、むしろ可変的であり、時として急激に変化することすらある、ということである。

われわれは、貨幣の購買力の変化を問題にする場合、自ずと時間という概念が想定されている、と理解して良からう。事実、Young自身も時間という問題を強く意識していたことが分かる。次の引用文は、この点を示唆するであろう。

「金が貨幣本位として生き残ってきた理由は金の価値の安定性に求められるべきであるというあなたの主張に、なんらかの証拠があるとは思わない。私が思うに、主要な事実とは、金を実用的であるというよりは耐久的、装飾的であるということ、そして金の価値は短期間には急激に変化しない、ということである。」(1922年4月12日付のYoungのWilliam T. Foster宛の手紙。Young papers. 下線は原文。)

この引用文から、われわれは、Youngが、金の貨幣本位としての地位を、装飾性に、言い換えれば、需要の弾力性に根拠を求めている、ということを確認できるであろう。ただし、金の価値は短期的には急変しないという指摘を考慮するならば、彼が「金の価値の安定性」という場合に念頭においているのは長期という観点であり、長期的には金の価値は安定的ではない、ということであろう¹⁷。

例えば、Youngは次のような指摘を行っている。「価値本位としての貨幣の欠陥は、とりわけ、繰延支払の本位としての貨幣そして価値の保蔵としての貨幣に当てはまることになる」(Ely 1923, p. 233)、と。「繰延支払」の機能は、短期の掛売・掛買などに係わる支払手段としての機能のことを意味するかと言えば、そうではない。Youngの説明は次の通りである。「われわれは多年という期間で貨幣を貸し付ける。その返済では、われわれは、消費財での貨幣の購買力が50パーセント下がってきているまた25パーセント上昇してきているということを知るであろう。そして同じだけの迷惑なうつろいやすさが、退蔵された貨幣に影響する。」(Ely 1923, p. 233) Youngが上記の貨幣の繰延支払の本位機能との関連で想定する期間とは長期である¹⁸。すなわち、長期的には貨幣としての

¹⁷ Youngは長期とか短期とか述べるが、われわれは必ずしもそれらの内容を具体的に把握できているわけではない。ただ、彼は期間の区分を行う際にA. Marshallのそれらを念頭においていたようにも思われる。たとえば、Knightの「長期(long-time)」と「短期(short-time)」という期間の区分に関連して、Youngは次のような助言を行っている。「Marshallが、考慮に入れる期間が短ければ短いほど供給と比べて需要の相対的意義が大きくなる、と示唆するとき、彼はこの問題について述べる価値のある全てを述べていないであろうか」(3月5日付のYoungのF. Knight宛の手紙。Young papers. 1922年頃の手紙と推測される)、と。

金の価値は安定的ではなく、むしろ変動的である、言い換えれば、長期的観点から価値本位としての貨幣を捉えると安定的でないという「欠陥」が存在する、ということである。従って、Youngは、「金が貨幣本位として生き残ってきた理由は金の価値の安定性に求められるべきである」という主張には賛同できない。

ついでに、ここで、貨幣の購買力の変動が引き起こす弊害について、傾聴しておこう。Youngは、「通貨価値による手品」が実質的影響を持つと指摘した後¹⁹、貨幣量の変化が引き起こす重要な影響として、1) 債権者と債務者に及ぼす不公平、2) 投資に対する利子率の計算の困難さ、3) 富の分配に及ぼす不健全な影響、4) 利潤やビジネス活動を促すとともに避けがたい崩壊を導く短期的影響の4つを挙げている(1923年1月9日付のYoungのBruce Bliven宛の手紙。Young papers)。そして、次のような言葉が続く。

「これらの理由および類似の理由から、貨幣諸問題の研究者皆に明らかなのは、共同体を構成する諸階級の永続的な利害は、かなり安定した(fairly stable)物価、すなわちかなり安定した貨幣価値によって、もつとも満たされるであろう。貨幣が安価であるかまたは高価であるかは、長期的にはわずかな違いしか惹き起こさない。われわれが恐れるべきは、安価な貨幣ではなくて、安価になりつつある貨幣であり、高価な貨幣ではなくて、高価になりつつある貨幣である。」(1923年1月9日付のYoungのBruce Bliven宛の手紙。Young papers。下線は原文。)

貨幣価値の絶対的な安定性は望みえないとするならば²⁰、「永続的利害」という観点から、Youngは長期的に貨幣価値が「かなり安定」していることが重要

¹⁸ 別の文献では、繰延支払との関連で、農夫が「抵当を担保に貨幣を借り入れて、10年間でローンを返済する」(Young 1924a, p. 4233) という例を挙げている。ちなみに、Youngは、繰延支払の本位機能を貨幣のひとつの固有の機能としては理解していなかったようにおもわれる。彼は、「事実の問題として、貨幣のこの機能は、他の機能同様に、貨幣は通常の支払手段であるという単純な一言に、実際包摂される」(Young 1924a, p. 4233)、と述べている。

¹⁹ 注6も参照されたい。

であると考えていたことを、われわれは窺い知ることができる。その際、彼は、貨幣の購買力が高かい状態でかなり安定する状況と貨幣の購買力が低い状態でかなり安定する状況との間には、諸階級の利害という観点から捉えた場合、大きな違いは存在しない、と考える。Youngにとっての関心事は、貨幣の購買力が変化する過程で惹起する実質的影響であり、その弊害であった²¹。

以上のことから、金本位制が理想からかなり懸け離れている貨幣制度であるということの内容が理解できた。金本位制は、長期的観点から見て、貨幣価値の変化を避けられないという意味では、「欠陥」のある貨幣制度であるということである。かといって貨幣価値の絶対的安定性は望えず、現実には「物価の一般的な変動、すなわち上下交互の変動を受け入れざるを得ない」とするならば、Youngにとっては、金本位制は、貨幣価値が短期的には急変せず、また長期的にも「かなり安定」する貨幣制度であった。

II - 2. 安定化のメカニズム

Youngは、長期的に貨幣価値が「かなり安定」しうるということを根拠に、金本位制を高く評価する。しかしながら、われわれは、何故に長期的に「かなり安定」しうるのか、その理由については知らない。そこで、以下では、その理由について、問うてみたい。その際、本節の冒頭で引用した一文、すなわち、物価の一般的な「変動は金のような相対的に安定的商品の産出の変化によって支配されるべきであるということの方がより好ましい」という一文が導きの糸となる。

²⁰ たとえば、Fisher宛の手紙のなかには、Youngの次のよう記述がある。「独立のそして絶対的『貨幣価値』という考えに触れて、「他のものとのその価格関係から切り離されたものとしての貨幣価値がどうしたら存在しうるのか、理解できないことから」、この考えを「わたしは排除すべきである」、と（1921年12月12日付のYoungのI. Fisher宛の手紙。*Young papers*）。

²¹ もっとも、この点を問題にしたのはYoungのみではなかった。当時の多くの人々の関心事であったのであり、実際、第一次大戦前から政治問題化していた論点でもあった。具体的には先に触れておいた「繰延支払の本位」という貨幣機能を巡る論争が繰り返されていた背景でもあった。

まず、われわれは、「相対的に安定的」とは、「かなり安定」という言葉の言い換えと理解してよかろう。とすると、われわれがここで注目すべきは、「商品」である金の「産出の変化」が意味する内容ということになろう。このような関心から、文献に当たると、次のような記述を見出すことができる。

「他の大部分の商品と比べてみると、貴金属は価値が比較的安定している。これはある面ではそれらの耐久性に由来している。というのは、鉱山の毎年の産出は金属貨幣の総ストックに対して比較的僅かしか追加しないからである。そしてある面ではそれらが非貨幣的に使用されるという特徴に由来する。その理由として、我々の装飾および虚飾という好みに仕える商品への需要は生活の必需品への需要よりも遙かに弾力的であるからである。」(Ely 1930, pp. 231-232)

Youngは、金の価値が相対的に安定している理由として、まず既存の貨幣用金ストックと比較して年々新たに産出される金が僅かであることを、加えて金はすべてが貨幣用として存在するのではなくて、非貨幣用としての需要も存在し、しかもこの需要が弾力的である点を指摘する。いうまでもなく、貨幣数量説を強く意識しての言及である。すでに言及したことであるが、この説は「価値の商品本位の必要性を認識することができず、そのために本位商品の産業的使用がその価値に及ぼす影響に意義を与えることをしない」のである。Youngにとって、本位貨幣としての金が商品であるということである。それは産出される商品であり、そして既存の貨幣用金ストックに追加されると同時に非貨幣用目的で貨幣用金ストックから漏れる出る商品であるということである。

Youngは、貨幣本位を「貨幣の観点からその価格が明確に固定されるひとつの商品である」と規定していた。われわれは、この規定に依りつつ、とりわけ価格の度量標準の事前的確定性という特徴を強調しておいた。だが、われわれが貨幣価値との関連で注目すべきは、そもそも貨幣は商品に起源を有するものであるが、金もまさに「商品」であるという事実である。この点が、金が貨幣本位としての機能を営む際の要点ということであり、そしてまた、物価の変動が

金の「産出の変化によって支配される」メカニズムを、言い換えれば、金本位制の自律性を解き明かす糸口ということになる。そこで、以下では、Youngに傾聴しつつ、このメカニズムを確認しよう²²。

彼は、貨幣数量の増加に伴う物価の一般的变化のメカニズムの説明に際して、次のような想定を行う。外国貿易を行わない孤立した共同体で、ひとつの集団の人々が「長く忘れられていた保蔵金」(Ely 1923, p. 296)を発見し、それらが追加的な購買力として既存の流通している金ストックに追加され、貨幣供給が増加するという想定である。なお、この共同体には銀行は存在するが、公共性の観点から余剰準備を管理する中央銀行は考慮されていない。もちろん、「現実の生活で一般的物価の変化が生じる諸条件はもっと複雑である」(ibid., p. 297)ということは十分承知の上での、メカニズムの一般化である。

「貨幣供給への追加部分は通常はまずは銀行準備にその進路を見いだす。その直接の結果として、割引率は引き下げられ、銀行融資を受けることが容易となる。銀行貸付の増加によって、銀行預金は増加する。そして共同体の直接の購買力は、銀行小切手を振り出す能力という形態をとるが、それに応じて増加する。物価は上昇せざるをえず、このことがより多くの貨幣を直接流通に流出させる。ひとびとは、物価上昇のために、『ポケットマネー』として手許により多くの貨幣を確保することが好都合である、と理解するであろう。最終的には、新たな攪乱要因が生じなければ、銀行準備にある貨幣量と流通界にある貨幣量の間に均衡が実現するであろう。」(Ely 1923, p. 297)

少しだけ補足説明を加えておく。新たな貨幣用金は、既存の貨幣用金ストックに追加される場合、当初は銀行準備への追加という形態をとる。準備増加は銀行にとって余剰な貸付可能資金の増加を意味し、このことが銀行の主体的な

²² Youngにとって、交換方程式は、ただ「貨幣量と物価の一般的变化の間の数学的必然の関係」を考慮するのみで、「貨幣量の変化が物価の一般的变化を引き起こすメカニズムについては何も教えてくれるものではない」(Ely 1923, p. 296)のである。

行動変化を、具体的には、銀行による割引率の引き下げをもたらす。貸付が預金設定という形を取ることから、銀行預金は増加し、この銀行貨幣が新たな追加的購買力として用いられることから、物価は上昇する。物価上昇に伴い、直接流通のための貨幣需要は増加する。その結果として、金貨流通が想定されていると推測されることから、銀行準備の行外流出によって、準備は減少することになる。退蔵金が追加される前の銀行準備にある貨幣量と流通界貨幣量の間の構成比に等しくなるまでは、流通界の貨幣数量の増加と物価上昇が相互に作用し続ける。そして最終的にはこの構成比に到達し、均衡が実現されることになる。

ところで、銀行準備と流通界貨幣量の間の均衡が再度達成されるということが、Youngのいうところの金本位制の自律性を意味しない。また、貨幣数量の増加に伴う物価の一般的变化のメカニズムを以上のように理解し、そこで留まるとするならば、このこと自体おおいに問題がある。なぜならば、「非常に重要な他の要因を考慮しない」からである。他の要因とは、「(1)貨幣的目的以外の金使用、(2)金の生産それ自体はその購買力に部分的には左右される」(Ely 1923, p. 297) ということである²³。これらの要因がどの様に作用することになるのか、傾聴しよう。

まず、Youngは、貨幣的目的以外の金使用として、金の工業的使用を具体的に取り上げている。ここで、確認しておくべきことは、貨幣用金とは異なって、「金装飾品と金製の他の品物は効用逓減の法則に従う」(Ely 1908, p. 277) ということである。

「金と他の商品の間の交換比率は固定されることになるが、それを促すふたつの要因がある。消費者は、一方で、絶えず他の品物の限界効用に照らし合わせて金製の対象物の限界効用を考慮している。生産者は、他

²³ Youngは、もう一つ、「(3) 国際的金移動が国家間の貨幣の相対的購買力に部分的には左右される」という対外的な要因も指摘している。しかし、ここでは、紙幅の関係から、国際的な金移動のメカニズムを詳細に触れない。また、Youngの関心は時間、しかも長期という時間に伴う金の産出であり、空間的問題は直接の関心事ではないように思われる。

方で、金製の品物の生産と他の素材の品物の生産からの相対的な収益性を考慮している。金は、工業的使用と貨幣的使用が金と他の品物の交換比率がそれらの使用において等しくするようなあり方で、配分されるであろう、ということは明白である。たとえば、貨幣ストック（金であれ、そうでなくとも）の増加が物価の上昇（すなわち、貨幣としての金価値の下落）に結果するならば、毎年造幣局に持ち込まれる金のより大きな量が工業的使用に流れ込む傾向があるであろう、そして従って貨幣量の増加を制限し、そして物価の上昇を制限する傾向があるであろう。」(Ely 1923, p. 298)

引用文の内容は、既存の金ストック全てが貨幣的使用に充用されているわけでもなく、また新規に追加される金が全て貨幣用金ストックに追加されるわけではない、ということである。まさに、「金の工業的使用と貨幣的使用の絶えざる均衡化と相対的利点の比較が存在する」(Ely 1923, p. 298) ことから、貨幣本位としての金価値は安定化する傾向がある、ということである。

上記の議論は、既存の貨幣用金ストックへの新たな金の追加を与件としてのそれであった、と述べて良かろう。そして、もし新規の金が年々かなりの量でしかも継続的に追加されることにでもなれば、貨幣本位としての金価値の下落は阻止しえないと理解できなくもない。しかしながら、Youngは、「金の生産それ自体はその購買力に部分的には左右される」ことを、すなわち、金の価値の変動が金の生産費に影響することによって、金の産出それ自体に作用するメカニズムが存在することを、指摘するのである。

その際に、まず確認すべきは、「鉱業は、農業のように、収穫逓減法則に支配され、そして両産業では価格が単位当たりの最大生産費に等しくなる傾向が存在する」(Ely 1923, pp. 298-299) ということである。このことを前提に、Youngは、「鉱山の経営者を通して、社会は金で購入されうる品物を生産する費用と金を生産するための労働及び資本の費用を継続的に比較している」(Ely 1923, p. 299)、そして、限界の鉱山では、物価上昇に伴い生産費が上昇することになれば、資本と労働は金鉱業から引き上げられ、他の産業へ移動することになる、

という。結局、「物価と賃金の上昇が金鉱業での支出を増大させる。そして、もし新たな金鉱が発見されるか、または旧鉱山からより安価に金を掘り出す方法が発明されないならば、金の産出は減少する運命にあるであろう」（*ibid.*）、という。かくして、「物価上昇が無限に続くことはない」（*ibid.*）、言い換えれば、貨幣本位としての金価値の限りない下落は起きえない、ということになる。また逆に、物価下落は金の産出を促すことになり、金価値の限りない上昇も生じえない、ということである。

Youngは、貨幣本位が商品であることの意義について、次のように述べる。

「これらのものは物価の長期（long-run）動向を安定化させる効果を持ち合わせる。極端な上昇傾向または極端な下落傾向は、それに伴う金採鉱の支出の変化、および年金生産のうち貨幣的流通と工業的使用に流入する割合の自律的な（automatic）変化によって、抑制され続ける。貨幣本位がそれ自体商品であるという事実の重要さが現れるのはこのような方法によってである。」（Ely 1923, p. 300. イタリックは原文。）

本節の冒頭で、われわれは、Youngが金本位制を「自律的である」と特徴付けていた事実に触れておいたが、これまでの考察から、金本位制の自律性が貨幣本位である金の商品という属性に由来することを理解できた。もっとも、Youngは、「金本位制について、それは完璧ではないが、相当に『安全』である、と述べてよからう」、と自らの考えを表明していた。では、なぜこのような控えめな表現を行うのであろうか。推測するに、彼が、金本位制の自律性が物価を窮屈に統括するというようには理解していなかったからではなからうか。たとえば、「長期的には、金の価値は、他の品物を生産する費用と比べられる金を生産する費用によって決定される傾向が、または少なくとも条件付けられる傾向がある。この傾向は、単なる傾向にすぎず、どの一時点をとらえても金価値を支配しない」（1921年10月3日付のYoungのF. R. Phillips宛の手紙。Young papers.）という記述もみられる²⁴。そうではあるが、Youngの理解では、「金本位制は、その欠点すべてを除けば、次のような大きな利点を持ち合わせている。

すなわち、金供給の変動、言い換えれば、主として市場の諸力の作用の結果は、政府の裁量的管理が及ばない、という利点である。」(Ely 1923, p. 259)

おわりに

Youngは、「現代の経済学の発展において、経済諸問題の純粋に貨幣的側面を大きく強調するようになったことほど、重要なものはない」(1923年1月9日付のYoungのBruce Bliven宛の手紙。 *Young papers*)、と指摘していた。この一文が、古典派経済学の貨幣観を意識してのものであることは明らかである。Youngは彼等の貨幣理解とは異なり、貨幣制度は物々交換の不便を取り除くための発明物ではなく、人間の他の諸制度と同様に、商品を起源として、成長または進化してきたものである。そしてまさにその進化の産物が金本位制であった。

Youngの理解では、貨幣は経済主体が思慮する際の言語であり、また時として彼らを惑わす言語でもあった。しかも、貨幣価値の変動が契約関係や私的所有制度をくりぬきまた景気循環を助長するなど、経済的諸関係に実質的影響を及ぼすことから、貨幣は決して単なるベールではなかった。金本位制もこれらの問題と決して無縁ではありえず、物価安定という観点からすれば、この制度も理想とはかなり懸け離れた制度であることは否めなかった。Youngは、金本位制の欠点を十分に認識した上で、貨幣制度に関しては、それを人為的裁量に委ねるのではなくて、まさに叡智と理解する金本位制に委ねることを強く支持したのである。

²⁴ 引用文は、Phillipsという人物のYoungへの質問に対する返答である。質問は他にもあり、まず「1オンスの金の価値とは何か」という質問には、「諸商品とサービスをタームとした金の購買力によってのみ計られうる」、また「誰が1オンスの金価値を固定した (established) のか」という質問には、「だれも『固定』しなかった。それは物価を決定する諸力全ての結果である」、そして「いつ現在の1オンスの金価値が固定されたのか」という質問には、「現在の金価値は文明化の始まり以降継続的に作用してきている諸力の結果である」、と返答している。引用文は、これらの質問の後の「金価値が決定された時、何がその基礎となったのか」という質問に対する返答であった (1921年10月3日付のYoungのF. R. Phillips宛の手紙。 *Young papers*)。

Youngが金本位制に信頼を寄せるのは、それが相当に安全な貨幣制度である、と理解するからであった。その理由は金価値の相対的安定性が市場の作用によって自律的に実現されるからであり、その結果として、貨幣価値が短期だけでなく長期的にも相当に安定的でありうる、と理解するからであった。同時に、このことは制度的要因に支えられる必要もあった。政府による金の売買価格の固定性、言い換えれば、価格の度量標準の事前的な確定性とその継続性を維持するためには、私的な経済主体による自由な鑄造・鋳つぶしの制度が不可欠であった。同時に、現実には、金本位制は近代的な銀行制度と不可分の関係にあり、むしろ銀行制度に組み込まれ、銀行制度によって維持されていることから、国内的には様々な信用貨幣を流通させまた統一的購買力を維持するために、さらに対外的には金が最終的な決済手段であることから、兌換性の維持という制度的要件は、単なる心理的要件ではなくて、実質的内容を伴うものであるべきであった。そして、このようなYoungの主張の基底にあって、それを支えていたのが、貨幣本位という固有の範疇であった。彼は、貨幣数量説がとかく混同する価値尺度と貨幣本位を明確に区別し、とりわけ後者の役割を重視し、またこれこそが貨幣制度理解の要である、と指摘したのである。まさに彼の貨幣理解の根幹をなす概念であった。

これらの主張の裏返しは、彼が貨幣数量説への疑義の開示でもあった。例えば、「数量説の最も極端なものは、名目貨幣の可能性を支持する議論の基礎をかたちづくるそれである」（Ely 1908, p. 280）という指摘から窺い知ることができるように、彼は、研究生活の早い時点で、不換の通貨体制の可能性に疑問を抱いていた、と思われる。だがその一方で、国内では不換通貨制度への移行を主張する論者が存在し、また戦後賠償問題で彼が親交を深めた J. M. Keynes も『貨幣改革論』を公刊していた。そして現実には、大戦後ヨーロッパでは、多くの国々が実質的に不換の通貨体制に追い込まれていた。Youngはこれらの事実を熟知していた。では、このような貨幣本位を欠く貨幣制度は、彼の目にはどのように映ったのであろうか。彼は投機がもたらす経済社会の不安定性を危惧していたようにも思われる。次は、この点を探ってみたい。

引用文献

- Allyn A. Young papers*. Archives of Harvard University, Pusey Library.
- Frank H. Knight papers*. Special Collections Research Center. The University of Chicago Library.
- Carlile, William Warrand. 1901. *The Evolution of Modern Money*. The Macmillan Company.
- Ely, Richard T., Adams, Thomas S., Lorenz, Max O. and Young, Allyn A. 1908. *Outlines of Economics*. Revised ed. The Macmillan Company.
- . 1916. *Outlines of Economics*. 3rd ed. The Macmillan Company.
- . 1923. *Outlines of Economics*. 4th ed. The Macmillan Company.
- . 1930. *Outlines of Economics*. 5th ed. The Macmillan Company.
- Foster, William Trufant and Catchings, Waddill. 1924. *Money*. Houghton Mifflin Company.
- Mehrling Perry G. 1997. *The Money Interest and the Public Interest: American Monetary Thought, 1920- 1970*. Harvard University Press.
- Young, Allyn A. 1924a. "Mystery of money: How modern methods of making payments economize the use of money. The role of checks and bank-notes: The enoumous edifice of credit." Ch. 31 in *The Book of Popular Science*, Vol. 12. The Grolier Society.
- . 1924b. "Money system of the U. S. : How the various elements of its money circulation first came into being: The evolution of the gold standard." Ch. 32 in *The Book of Popular Science*, Vol. 13. The Grolier Society.
- . 1928. "Economics." *Encyclopaedia Britannica*. The Encyclopaedia Britannica Company.